

# サハラ砂漠のオアシス ジャネットの結婚式

アルジェリアの南東にあるオアシス、ジャネット。ここでは、数日間にわたり、新郎と新婦がそれぞれの客を迎え、別々に祝います。新婦と村の女性たちが行う、3日間の結婚式をご紹介します。

明日は、ファティマの結婚式。い  
とこのアイシャの家では、ファティ  
マの結婚式の準備が進められている。  
キッチンでは、子ども達と女性達が  
翌日のパーティで配るポップコーン  
などを作り、隣の中庭ではアイシャ  
と友達がプラスチックの花やレー  
スを大きな絨毯に縫いつけ、式の飾  
りを一生懸命作っている。

★  
新婦のファティマは22歳。石油掘  
削会社に勤めている33歳のムサと結  
婚することになった。



ガンガを叩く女性。祭りにはかかせない楽器

ファティマもアイシャも、ジャネ  
ットのゼルアズ村で両親と一緒に住  
んでいる。住民のほとんどはトゥア  
レグ族といい、元は砂漠の遊牧民だ。  
トゥアレグは元来、母系社会である  
為、一夫一婦制や、女性の離婚の権

利といった女性の自由を認めている  
が、イスラム教の影響を受けている  
ので、公共の場では男女は分けられ  
ており、日常生活で男女が直接出合  
うのは難しい。  
そんなジャネットでは、ほとんど



100円ショップ顔負けの青空市場



椰子の木

## フリカ



◀ 壮大な砂漠に囲まれている

のカップルは携帯電話を通して付き合い始める。恋人同士の付き合いは、兄妹や親戚を通して、まず電話番号を交換し、そして何度となく長電話を重ねた後、二人きりのデートとなる。月明かりの下、男がテントに、密かに女をくどきにきた昔のように、トゥアレグの逢引は皆の黙認のもと、人目を引かぬよう礼儀正しく行われる。

トゥアレグ族の結婚式は、一般的に3日から7日にわたり、費用を負担する新郎の財力によって日数が決まる。式には、ほぼ村人全員が参加するといつてよく、その費用は年収をはるかに上回る場合もあり、その上、新郎は新婦に、新居を与えることになっている。婚約してから約2年、ムサは1400キロ北にあるハシメサウドの精油所を往復しながら、結婚資金を稼いで新しい家も建てた。この期間は長く思えるかもしれない

が、ジャネットの平均月給が1万ディナール（約1万4千円）であることを考慮すれば、月給3万ディナールのムサは恵まれている。もっと婚約期間が長くなるカップルもいるわけだ。

トゥアレグ族には、代父、代母と呼ばれ、実の両親が亡くなった場合、残された子どもたちの面倒をみる人を決めておく習慣があり、その人たちがそれぞれの祝いの席を設ける。ファティマ達の結婚式は3日間行われる。

新郎側は、クスクスを食べ、お茶を飲んだりしながら、おしゃべりをして祝う。対照的に新婦側は、

日ごとの儀式と、ダンスあり音楽ありのお祭りを行い、結婚を祝う。普段は慎ましい暮らしぶりの女性達だが、結婚式のような大きなお祝いの時には女性が主役となり、協力して式を行い、喜びを分かち合う。



ジャネットへと続く道



セルアズ村

**ジャネットとは**  
ジャネットは、細長いオアシスで、椰子の並木に縁取られた中央通りをはさんで、6つの村落がある。居住者数は1万5千人。男性達は、観光客のために、旅行会社の経営や観光ガイド、ラクダ使いとして働いている者が多いが10月〜4月の観光シーズン以外には若者達に職はなく、失業率は高い。

10年ほど前よりアルジェリア北部から、大勢のアラブ人が移住をしてきたこともあり、水道、電気などが整備され、町の中心部は家電店、家具店、100円ショップ、顔負けの青空市場などが立ち並ぶ。街中は、ターバン姿の男達が運転するトヨタの四駆車が駆け巡り、各家庭にはテレビがあり、衛星放送で他の国の番組も見られる。

気温は、10月〜3月は0度から25度、4月〜9月は5度から35度。ジャネット近辺の雨量は不規則だが、降水時のみに流水のある河川、ワジや地下水によって椰子の木の庭園は一年中枯れることはない。

女性達は母親や祖母の遺産である小さな庭を持ち、そこでナツメグや様々な果物、穀物を育て、家畜も飼育している。





# 1日目

朝から、ヘナ儀式の準備が始まる。午前9時、6人くらいの女性エスコートが、ヴェールで顔を隠したファティマをアイシャの家へ連れて行く。エスコートはこの3日間の結婚式が終わるまで新婦に付き添い、親戚や親友の前以外では顔を現してはいけない彼女を大切に守る。

小さなリビングでは、テレビからコーランが静かに流れ、女性達は新婦を囲んで、花やハートなどの模様に取り抜かれた粘着テープを丁寧に手に貼り、水に湿らしたヘナのペーストを貼る。大体一時間かけてペーストを貼ったあと、ファティマは手足をビニール袋に包まれ、ソファに寝かせてもらう。ヘナが肌を綺麗な濃い赤に染めるまで、そのまま5時間動かずに待たなければならぬ。その間、ファティマはテレビをぼんやり見ながら、コーランの詩篇をつぶやいていた。

## インディゴ・ベールの儀式

午後4時になり、新婦の準備が整った。これから、トゥアレグの伝統

を永続させるインディゴ・ヴェールの儀式が始まる。インディゴは太陽の日ざしから肌を守る特性があり、肌に潤いを与えるといわれている。この藍色はトゥアレグ族の象徴で、その為、彼等はブルーメン（青い人々）と呼ばれているファティマは慣習に従いエスコートをされながら、砂道をうつむきながら歩き、会場であるアイシャの叔母さんの家へと向かった。夕方の柔らかな光があたり

中庭の石壁に、ファティマを待つ女性達が青や緑の衣裳を着てもたれかかっている姿は素敵な風景である。到着すると、部屋でファティマも青いアルバイと呼ばれる、伝統的なゆつたりとした長いチュニックに着替え、頭と肩にきらめく純白のヴェールを被り、中庭の奥に座った。

スカーフの隙間から目だけがのぞく老女が儀式を始める。新婦の白いヴェールを脱がせ、トゥアレグ伝統のインディゴ・ヴェールを重々しくかぶせる。そして、改めて白いヴェールをその上にかけた。儀式はユーユーの叫び声で迎えられる。ユーユーは、トゥアレグ族の女性に伝わるもので、舌を激しく上下に動かしながら高い声をあげ、喜びや感動を表現する鋭い叫びである。



ヘナは薬用植物で化粧品としてイスラム教徒の女性に使われている。新婦だけでなく、結婚式のために皆、手足をヘナで染めている。



上・先祖の遺産。右・新婦のエスコート達。独身女性は顔をベールで隠すことはないが、結婚後は他のイスラム国と同様に、顔の露出は控えなくてはならない。左・粘着テープを貼ってもらうファティマ（右）





祭りの会場

このヴェールの儀式が終わると、いよいよ夜の祭りが始まる。  
会場は、アイシャの家の前に広がる砂道の一角にブリキ板で囲われた広いスペース。ここで今日と明日の夜、女達の歌声と太鼓が響き渡る。女性なら外国人でも歓迎されるが、男達はこのお祭りに参加する事はもちろん、見物する事も禁じられており、場外で家に戻る妻や姉妹を四駆車で待つのみだ。

## 夜の祭りとヘナ儀式

そしてファティマの祖母、曾祖母の遺産である彫りのある銀の結婚指輪2つ、ブレスレット2つを身につけ、白い皮のサンダルをはかせられる。さらに、老女は藤の籠に載せた噛みタバコ、紅茶とお砂糖の小さい山を混ぜあわせ、祝福の言葉を唱えながら新婦の髪分け目に載せる。ヴェールの儀式は結婚するトゥアレグ女性にとって、祖先からの贈り物を受け取るとても重要な式である。

女の子達はアイシャの部屋で、いつものお化粧を一生懸命にしたり、ドライヤーで髪を伸ばしたり、派手なワンピースに着替えたり、いそいそお洒落をしている。お洒落がすんだ女の子達は、会場の新婦のソファの前に座り、飾りつけを見ながら、楽しそうにおしゃべりをしていた。配られたポップコーンの袋を開

き、ピーナツとあめが一緒に入った中から占いくじ券を出し、今日にないことは明日にある、やマイケル・ジャクソンよりよろしくと書かれたメッセージを読みながら、大笑いしている娘たちもいた。

新婦とエスコートが会場に着く頃には、ゼルアズとその他の村からやって来た150人くらいの女性が集まって来た。招待客たちは、なんとも興味深い。伝統的なアルバイを着たお婆さん、デコルテ姿の娘、赤銅色の肌、金髪、黒人、アルジェリア北部ガルダイア地域の派手なドレスなど、年齢、容姿のさまざまな女性達が混りあっている。ファティマは皆のユーユーの暖かいもてなしを受けながらソファに座り、左右には二人の親戚が囲んで座った。ファティマは白いスパンコールをちりばめたドレスと先のとがったヒールシューズというアラブ式のファッションをしているが、白いヴェールをかぶりうつむく姿は、トゥアレグの価値観に従う慎みと羞恥心を表していた。

そこに、ヘナ儀式を告げる太鼓の音が聞こえてきた。女性達は家を出て、ガンガという皮の太鼓を叩き歌いながら、段々と追いついた女性達と一緒に、新婦の回りに半円を描



ヘナが染まるのを、じっと待つファティマ

く。白いヴェールの列が光輪のように囲む。輪の中で、女性達はアルバイの長袖を右左に振りながら、合唱する。一人の女性がヘナの入ったピンク色のバスケットを持ち歩き、新婦の下に跪く。そして、健康と豊穣を象徴するヘナを手足に少しつけてから、周りで掌を差し出す娘達にも情深く配った。

式が終わると、エスコートはユーユーの響きと共に新婦を連れて会場を去る。新婦は翌日の結婚式まで両親の家で最後の夜を過ごすのだった。



## 2日目

朝9時、女性達は大騒ぎで、鍋やガスコンロ、食器、ナイフなどを持ち寄り、アイシャの家の中庭に続々と集まった。今夜のお祝いの料理を作るのだ。メニューは、クスクスとサラダ、オレンジジュース。クスクスは、パスタに使われるセモリナ粉を粒上にし、肉や魚、野菜などを使ったソースをかけて食べる北アフリカの家庭料理だ。砂上に用意されたキッチンに道具を置くと、莫座の上に座って料理をはじめた。それぞれグループに分かれて、野菜の皮をむいたり、さいの目に刻んだり、鉢の中でにんと棗の実をつぶしたりする一方、羊とラクダの肉を切る女性もいる。遅れて到着した女性達は、甜菜、トマト、キュウリなどの季節の野菜でサラダを作った。



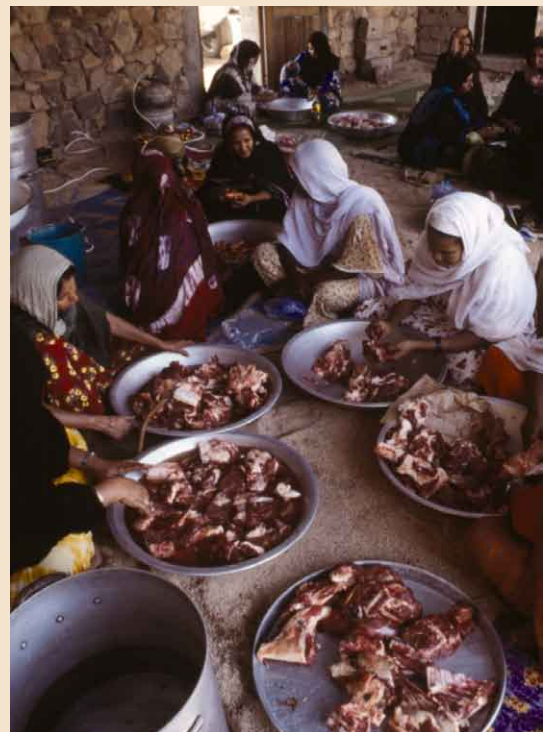
クスクスにかけけるソースとサラダが出来上がったところで、クスクスのセモリナの加熱が始まる。粉を水とバターでふくらませ、大鍋の上で15分程蒸し、特大の入れ物に入れ、手で細かい粒にし、出来上がり。これで料理の準備は整った。

## 歌と踊りで祝う最後の夜

夜9時、昨日と同じ女性でいっばいの会場に、二人の若い男性デイスクジョッキがやって来て、流行りのアラブ曲をかけ、祭りが始まった。スピーカーの隣では若い少女達が笑いながら、お姉さんの真似をして腰を一生懸命振り、可愛らしく踊っている。段々盛り上がってきた時に、女性ミュージシャン達がデイスクジョッキと交代し、会場の真ん中に輪になって座り、デルブカのアラブ太鼓、テンデの皮造り太鼓、ブリキ缶などを叩き、皆でトゥアレグの伝統的な歌を歌い始める。あちこちで女性が二人組みで立ち上がり、腰にスカーフを丁寧につまみ結んでから、腕をしっかりと動かし、ヒップをゆつくりと振り、前後に進み踊る。集まった女性達は座ったまま手を叩き、自分の金ブレスレットや携帯電話を好



楽しいおしゃべりと共に作業は進む



ラクダ肉を器に取り分ける女性達。ラクダからは大量の肉がとれるため、結婚式など大人数が集まる時によく使われる



◀ 結婚式のメニュー





セモリナの加熱。式の一ヶ月前に、新郎から村の女性全員にセモリナ粉があらかじめ配られ、各自粒上にしたものを、当日持ち寄り調理する

きなダンサーに手渡して（これは後から返してもらうのだが）、満足度を表し、激しくユーユーを叫びながらダンスを盛り立てる。ミュージシャン達も、ヴェールの裾に挟まれる紙幣のお陰でますますのってくる。

その頃、キッチンの中では、食事の用意に大騒ぎだ。アイシャ達は大きなバケツから一生懸命オレンジジュースをプラスチックボトルに移し換え、中庭では大勢の女性達がクスクスを30くらいの容器に分け、ソースを掛けたり、お茶の用意をしている。そして次々とパーティー会場の入り口に現れては、大きい銀の盆

を持ち歩き、お客さんの頭上でクスクスとサラダ、オレンジジュースのボトルを上手にまわして、最後にお茶の小さいグラスを皆に配ってから、お線香の香りいっぱいヴェールを漂わせて、キッチンに消える。

その間、アイシャの叔母さんの家で、ファティマは花嫁衣装に着替え、出番を待つ。女性達は彼女のアルバのローブをお香の上に広げて、良い香りを沁みこませ、最後にメークアップをチェックし、いよいよ出発する。ゼルアズの静かな道を、新婦はうつむき、左右を親戚の者に支えられてゆつくりと歩く。

ファティマが女性満杯の会場に現れると、皆がちょうど食事を終え、パーティーが再開される時だった。一斉に巻き起こるユーユーの声は、まるで一陣の風のように。新婦がソファの上に座るまでその声は続く。花嫁はエスコートと一緒にソファに並んで座り、ヴェールの下から皆の楽しんでる姿をじっと眺めていた。11時になると、道の向こうからやって来た新郎側の男性エスコートが歌う声がかすかに聞こえてきた。それを合図に、年寄りの女性達はファティマに近寄り、耳に何かをつぶやく。するとユーユーの叫び声が沸き起こり、立ち上がった新婦は、エスコートと一緒に会場を去る。

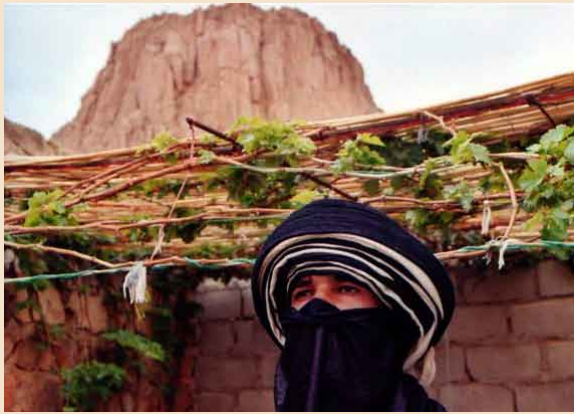


ミュージシャン達。祭りを盛り上げる

## 3日目

朝早く、ファティマはエスコートに伴われて、夫の代母の開催した祭りに連れて行かれた。彼女は部屋に入り、白いヴェールで全身を隠し、夫の家族からもらった金の宝石と紙幣を頭の上に乗せられ、そのままじっと座る。

二つある中庭では、それぞれ世代の違う祭りが同時に行なわれている。中庭の一方では年上の女性達が集まり、金の宝に満足するのと強烈な声で歌う老女にあわせ、ガンガと太鼓を叩き、踊る。顔をベールで隠しな



新郎のムサ







女性は、母親や祖母から受け継がれる小さな庭を持ち、そこでナツメグや様々な果物、家畜の飼育をする

がら、トランス状態で踊る女性の姿も何人か見てとれた。

もう一方の中庭では、友達からフアティマへのお祝いの品を紹介している。アラブのダンスミュージックで盛り上がりながら、一人の女性がスリッパ、ガウン、シーツなどを賑やかに紹介している。その他にも、絨毯、ガスレンジ、ヒーターなどがプレゼントされたようだ。彼女達が結婚する時には、今度はフアティマがお返ししなければならぬ。

お昼になると、皆は特別なご馳走であるラクダのレバーと内臓のソースをかけたマカロニを食べ、お茶を

飲んでから帰っていった。



その夜、フアティマは初めて新居に足を踏み入れた。エスコートに伴

われ、一緒に感嘆の声を発しながら、明々と電灯を付けた各部屋を訪れる。新居はジャネットの伝統的な家と違って中庭がない西歐式のコンクリート造りである。

家の点検が終わると、新婦とエスコートは新郎と友達が集まっている大きいリビングに入る。そこでは、ガンガを叩き歌う老女達の周りで、男達がトゥアレグ族の伝統的な刀を振り回しながら踊っていた。この賑やかな新築祝いは、新婦が徐々に新しい環境に慣れるために行い、これから自立してきちんと家事を営むよう、娘時代と別れる為の通過儀礼なのである。夜遅くまで音楽は続き、老女達を最後にお客さんは次々と引き上げる。

こうして結婚式は終わりを告げ、

女性達は、また元のジャネットの静かな日常生活にもどっていく。

ちょうどドラマダンというイスラム教による断食の聖月が始まり、オアシスは6時の夕暮れまでほとんど活動がなく、結婚式も行われない。しかし、あと9ヶ月も経てば、フアティマは子供を生むために実家の母のところに戻り、再び、男子禁制のお祭りが盛大に行なわれるだろう。

デコート・豊崎・アリサ 1970年パリ生まれ。父はフランス人、母は日本人。98年国際協力団体による砂漠化防止計画の通訳をきっかけにサハラ砂漠と出会う。その後、トゥアレグ族に関する執筆活動を開始。2004年にはサハラ砂漠を横断する塩キャラバンのドキュメンタリー映画を4ヵ月かけ撮影。ジャネット及び観光の情報を自身のサイトでも紹介している。  
<http://20six.fr/sahara-eliki>

